

歴史文化学科にいらっしやいませ

村岡幹生

(中京大学評論誌『八事』三〇号、二〇一四年 再録)

二〇一四年度、中京大学文学部に歴史文化学科が始まる。日本史学に加えて日本民俗学を教育研究の中心とした学科だ。私が学科作りの準備に実際上かわり始めたのは、まだ国際教養学部籍を置いていた二〇一一年度だから、以来ようやくにして、ゴールいやスタート地点が視野に入るところまできたというのが、今現在の実感だ。

歴史文化学科という看板はともあれ、文学部の史学系学科はこと新しいものではなく、むしろ定番、老舗学科といえる。旧帝大退職後の或る先輩は、「就職難のいまどき、受験生を集められるのかい。中京大学理事会はよくぞOKしたものよ。」という、遠慮のない、少しひややかな感想を直接に語ってくれた。あとで思うに「お気の毒に」という、私へのいたわりだったのかも知れない。

一方で、「歴史ブームだから歴女が押しかけるよ。」と、あまり根拠にならない理由をあげて励ましてくれた方もある。あとで思うに、あれは意味深長で「教育研究成り立つの？ 覚悟しといたほうがいいよ。」という、私への警告だったのか。

スタート約半年前(二〇一三年九月)時点の風景はどうか。七月十三、十四日のオープンキャンパスでは、今年度からこの学科のスタッフ予定者として着任された播磨良紀教授による専門的内容の模擬授業に、二日間で約二〇〇人の高校生が熱心に応じてくれた。定員六五名の学科であるから、悲観したものではない。国公立大学において経営戦略がどのように練られているかは知るところでないが、わが文学部では歴史文化学科構想・準備段階において、教務課や入試センターに

周到な調査を重ねていただきつつ、カリキュラム戦略が練られたのである。また、ブームを当て込んでいて受験生が押し寄せるはずもなく、歴史文化学科の教育研究の目的およびカリキュラムの特長にそった的確で熱意を伴った広報・営業活動あつての現地点である。

さて、『八事』誌今回のテーマは「原点」である。本学で二〇年以上担当してきた私の全学共通科目「日本史」授業は、「歴史学は原点回帰を特徴とする学問である」ということを、学生に理解してもらうことを核心としてきた。

歴史を知るのは容易でない。過去は直接見えないからである。過去からの実況中継という設定のテレビ番組タイムスクープハンターが劇場版まで制作され人気を博しているのは、見えないはずのものを、今自分が見ているようにしてくれるからだ。多くの人にとって「歴史を知る」体験とは、このように、自分には見えない過去を、いま目の前にいる誰かが示してくれる体験である。年長者による自身の体験語り、歴史小説、歴史研究者の著作、テレビなどの歴史ドラマ作品、学校の歴史の授業、すべて然りである。誰かが語り、誰かが示すイメージを、受け手が自らの頭の中にイメージとして定着さ

せることで「歴史を知る」体験ができてあがる。多くの人にとって「歴史を知る」とは、こうした伝達行為の結果としてある。じつはこうした伝達行為によつて「歴史を知る」ことが成り立つには前提がある。過去を示す者とそれを受け取る者が、過去の或るポイントに向けて同方向を視ているということ、また両者の間に暗黙のうちに共有された知識が存在するということである。

ももいろクローバーZのメンバーに「先の大戦をどう理解しているか」というテーマで若手社会学者が質問をしたら、終戦の年は「一〇三八年」、戦った相手国は「韓国」といった珍答続出という新聞記事を、この夏読んだ。また昨年だったか、私の授業で旧国名をテーマにしたとき、「北海道は近代になって日本に編入されたから、旧国名はない」と言及したら、授業後の提出用紙に「北海道がもともと日本でなかったと初めて知りました。もともとはどこの国だったんですか。」と書いた中京大生もいた。揶揄しているのではない。彼女たちにとつて竹島や尖閣諸島をめぐる報道は、どんなふうに受け止められているのだろうか。先の新聞記事には、ももクロの或るメンバーは「歴史（の授業）で習うと日本の事じゃな

いような気がして」と述べたともあった。彼女のなかにある「日本のこと」のイメージとは、どんなだろう？

歴史を伝えるのは容易でない。過去への関心は人それぞれだからだ。過去のことは今の私やこの国に関係しないと思う人は、歴史を伝える側にも歴史を知りたい側にもいない。またそれとは逆に、過去があまりに重く自身にのしかかりそれを見ることがつらい人も、然りである。「未来志向」とか「復興」とかいうことは、こうした人々にとって、自らを正当化するよるべであり、また救いである。皮肉がいいいいのではなく、これは受け止めねばならぬ現実だ。今の日本人の大半とまでいえぬとしても、世代を問わずそうした立ち位置の人々は、各方面を牽引すべき立場にいる人たちを含め相当数いる。そういう意味で、日本社会の根のところに蔓延する歴史離れ、さらにいえば、実際の社会や国家から浮遊し自己完結に進む自意識と自国認識の状況を、たしかに見据えておかねばならぬ。

一方、『日本経済新聞』二〇一三年七月十八日付に、「人氣が低迷する文系学部が少ないなか、日本史を学ぶ学科や専攻の志望者数は比較的堅調に推移している。折からの歴史ブー

ムが……追い風」「明治大では日本史専攻の定員を一五名増加、などの記事が載っている。「ゲームや漫画きっかけに興味」というサブ見出しが付いている。さすがに、ゲームや漫画での興味だけで受験の学科選びをする若者が主流であるはずはないと思うが、ここには歴史を知りたいという動機がたしかに存在している。「知りたい」があることこそ、すべの始まりである。金子みすゞの詩に倣えば、過去の歴史は今見えぬ。見えぬものでもあるんだよ。見えぬけれどあるんだよ。その見えない過去を視ようとするとする彼らの視線の先が何であろうとも、過去を、今に生きる自身の糧としたいと欲求する若者が、少なからず確かに存在している。

「日本史を学ぶ学科」の門をくぐった彼らを迎えるのは、歴史学である。「たしかにある」はずの過去は、証拠を探りあてねば、今見ることができない。歴史の証拠とは、過去の人が今に残した痕跡、すなわち、古文書、遺物、伝統的習俗などである。これら過去が今に残した痕跡こそが歴史の原点であり、歴史学はこれを拠り所とし、いつでもここに回帰する。優れた漫画によって喚起された歴史のイメージであれ、

歴史小説の示す人物像であれ、歴史ドラマ・映画であれ、教科書に書かれていることであれ、研究者の最新の研究成果であれ、すべてはこれらの証拠と矛盾したり、証拠が存在しないのであれば、それは、歴史ではない。これが歴史学の立場だ。歴史学の原点は、このように比較的単純で明白だ。

さらに、ここでは「歴史を知る」という行為が、他者の示したイメージを受け取るのではなく、みずから証拠探しに踏み出す主体としての行為に転換する。そして気付く。

「歴史を知る」とは本当はこういうことなのだ、と。

私の全学共通「日本史」の授業を受講したある学生は、学期末の提出用紙に次のように書いた。「歴史は根拠＝史料が大切とわかりました。その史料も鵜呑みにしてはいけないということ、史料批判という過程も示してください、私たちもやってみるということで課題も出されました。課題は難しかったです、歴史学とは実に深い学問とよくわかりました。」と。こういう学生には、定期試験の答案なんか関係なく、成績S評価を与えたい心境だ。この学生は、授業の課題も人生の課題も「難しいな」と格闘しつつ、自身の力の及ぶ限りでの正しい答えをそのつど探し当ててゆくだろう。

歴史を伝えるのは難しい。世代の異なる私などが若者に歴史を伝えるのは至難といつてよいだろう。歴史を伝えようとしてみてもうまく伝わらないことを嘆くのは、もうよしにしたい。大学の歴史教育や個人の奮闘で補えるものではない。先のももクワの記事がまとめているとおり、初等・中等教育の深刻な反省なくして状況の変化は始まらない。

中京大学文学部歴史文化学科のカリキュラムや授業内容は、学生に歴史を教えることを主たる内容とするのではなく、「歴史を知る」主体として学生を育てるものとして用意している。かくして、私のこの大学で生きていく道も用意した。

歴女ばかりがもてはやされているが、歴史男子はおらんのか。いるなら来い。歴女も来やがね。甘くはないぜ。おっと、今はにこにこ笑顔と営業ことばで「いらっしやいませ」。

【付記】時の移ろいは早いものです。退職にあたり、歴史文化学科の「原点」を現今の学生諸君にもご覧いただきたく、編集部に再録をお願いしました。なお、歴史文化学科の定員は現在七〇に増員されています。